

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第427号 平成24年11月2日

マララの祈り

パキスタンの北西部でイスラム武装勢力「パキスタンのタリバン運動（TTP）」に頭部を撃たれ瀕死の重傷を負い、イギリスで治療を受けていたマララ・ユスフザイさんが、意識を取り戻し、回復に向かっています。まさに、奇跡といって良いでしょう。

ご家族の喜びは想像に難くありませんが、遠く離れた日本でも、多くの方々が彼女の回復を願っていたと思います。

家族の話として、マララさんは「回復したら帰国して学校に戻りたい」と話しているとの事ですが、その思いが実現するよう祈りたいと思います。

一体何故、TTPは、まだ14歳に過ぎない少女を銃撃するという残酷な行為を行ったのでしょうか。

3年前、地域での女子教育を禁止していたイスラム教過激派が、マララさんの通う学校を燃やし、人々を恐怖に陥れるという事件が起こります。当時11歳だったマララさんも、この事件に巻き込まれた一人でした。その後彼女は、イギリスのBBC放送に匿名の投稿をして現状を訴えます。この行為は、イスラム過激派によって教育機会を奪われていた多くの少女たちの共感を呼ぶところとなり、昨年パキスタン政府から国家平和賞を授与されるなど、若き人権活動家として国際的にも知られるようになりました。

TTPは、マララさんの事件に関して犯行声明を出し、「今回の事件はマララさんが教育権を求める運動を行っていたことに対する報復であり、自分たちに反対する発言をする者は同様の運命をたどるだろう」と述べています。

主義主張の違いを、武力で解決するしか知恵がない事は、沢山の不幸を呼び込みます。

第1の不幸は、マララさんを含め多くの人々が偏狭な大義によって傷つけられたり、亡くなったりしている事です。

第2の不幸は、マララさんは、幼いながらも大変勇気ある女性でした。しかし、大半の人は、暴力を恐れ、平和の中で学びたいという、その極当たり前の、ささやかな願いさえも諦めているに違いありません。それは、夢を諦めた人々の未来への扉を閉じただけではありません。地域が豊かになる道をも閉ざしてしまっています。

第3の不幸は、TTPが、自分達の大義によってますます孤立し、自分自身の首を絞めている事に気づいていない事です。いや、もしかしたら気づいているのかも知れません。このままでは自分達は生き残れないと。そして、そう気づいているが故に、一層過激になっているのかも知れません。そうであるなら、彼らがまき散らす不幸は、余りにも深いというべきでしょう。

武力によっては、人々の心は変えられません。彼らを武力で鎮圧しても、第2、第3のタリバンが生まれるだけです。結局、社会を変えていく大きな力は、教育にこそ求めるべきではないでしょうか。

マララさんが回復し、再び学校に通うようになれば、多くの少女たちもまた学校に通うようになるでしょう。それを、地域が守り、国が支え、安心して、自由に学べる社会が実現したら、パキスタンは確実に幸せな国に一步近づくに違いありません。

マララさんの願いは、その一点にあるのではないのでしょうか。(塾頭：吉田 洋一)